東京純心大学紀要　現代文化学部　第24号（2020）pp.1 ～ 20

近代朝鮮における＜童話＞の形成過程 —— 方定煥が翻案したイソップ寓話「ソウルねずみと田舎ねずみ」と創作童話「田舎ねずみのソウル見物」の考察 ——

A Study of Bang Jeong-hwan's Encounter with Aesop's Fable "The Mouse in the Town and the Mouse in the Country"

大　竹　聖　美

Bang Jeong-hwan has established the concept of modern fairy tales in the history of Korean children's literature. In this article, I examine his editorial, "Newly Developed 'Fairy Tales'" (1923), in which he presents his view of fairy tales. In this editorial, Bang Jeong-hwan wrote that it is important to accept the world's best fairy tales and to collect oral traditions from ancient times in Korea.

"Fairy Tale Theory" written by Bang Jeong-hwan, accepts much of the discourse of Toshio Takagi, a leading folklore scholar of contemporary Japan, and Mimei Ogawa, a literary scholar. The year after the fairy tale article was published (1924), he translated the Aesop allegory, "The Mouse in the Town and the Mouse in the Country." The adaptation notably uses Korean vocabulary that is easy for Korean children to understand.

In 1926, he published a new fairy tale, "Funny Fairy Tales / A Story of a County Mouse Sightseeing in Seoul." This work is a satire-like fairy tale with humorous criticism of modern civilization.

From these works, one can read the nationalism of Bang Jeong-hwan, who values Korean culture while learning from fairy tales around the world, and the unique perspective of Bang Jeong-hwan, who satirizes modern civilization and urban life with humor.

キーワード：朝鮮、韓国、児童文学、童話、児童文化、方定煥

1. はじめに

韓国児童文学の成立過程は、近代日本における童話・童謡に関する文芸思潮との関係史考察を抜きに語ることはできない。

童話・童謡の隆盛期である1920年代に東京と朝鮮を行き来した方定煥[i]は、近代朝鮮児童人権運動、近代朝鮮児童文学・文化創立運動を推進した核心人物である。

方定煥は、1921年5月1日に天道教[ii]少年会を組織し、1922年に儒教規範の朝鮮社会において画期的だった近代的児童人権意識を基盤とした「オリニナル（子どもの日）」を宣布した。

また、同1922年7月には、現在、韓国児童文学史の出発点における重要な一冊と見なされている『愛の贈り物（사랑의 성물）』（京城：開闢社、1922年7月7日）を刊行している。本書は、世界の有名名作童話を翻案した童話集である[iii]。

さらに、この世界名作童話集刊行直後の1922年8～9月には、雑誌『婦人』『開闢』を通して「朝鮮古来童話現象募集」という広告を出し、朝鮮の昔話を集め始めた。方定煥は「世界名作の翻案紹介」と「朝鮮昔話の収集」という二つの異なる仕事を同時に行った。こうした方

定煥の児童文学・文化に関わる方針は、1923年1月の『開闢』誌に次のように表明されている。

> いまだ我々には童話集が何冊か、また童話が雑誌に掲載されてもたいがい外国童話の翻訳に過ぎなく、我々の童話としての創作が見えないことは少々寂しいことであるが、だからといって落胆することはない。他の文学同様童話も一時期の輸入期は必然としてあるもので、また、初めて鍬をもった我々はまだ創作に汲々とするよりも我々の古来童話を掘り起こし、一方では外国童話を輸入して童話の世界を広げ材料を豊富にすることに努力することが順序であるように思う。(拙訳)(方定煥「新しく開拓される「童話」に関して——特に少年以外の一般の人に——」『開闢』31号23頁、1923年1月)

本稿では、ここで述べられている外国童話の中でも、方定煥によって紹介されたイソップ寓話について考察しながら、方定煥がどのように「童話」を認識し、『開闢』誌において述べたように、朝鮮において童話を「新しく開拓」したのか具体的に検討したい。

2. 「イソップイヤギ(おはなし)／ソウルねずみと田舎ねずみ」

『オリニ』1924年1月号に、方定煥はイソップの「家ねずみ　野ねずみ」を「イソップイヤギ(おはなし)／ソウルねずみと田舎ねずみ」というタイトルで翻案紹介した。目次には「ソウルねずみ　田舎ねずみ(寓話)」とある。

イソップ寓話は、朝鮮初の近代的啓蒙雑誌を創刊した崔南善の『少年』誌の創刊号(1908年11月)に「北風と太陽」などが紹介されたほか、尹致昊[iv]によって単行本で刊行されていた[v]。聖書とイソップ寓話は、早い時期から朝鮮の近代化に影響を与えた西洋書籍であることに改めて気づかされる。

ところで、方定煥が紹介した朝鮮語版イソップ寓話は、次のような二点の特徴を指摘することができる。一つは、この作品は1920年秋に方定煥が渡日した後の仕事であり、1922年に刊行した最初の童話集が日本語書籍からの翻案作品を集めた世界名作童話集であったことから、このイソップ寓話も日本語で書かれたものを底本にした朝鮮語への変換であると思われる点。もう一つは、「家ねずみ　野ねずみ」を「ソウルねずみ　田舎ねずみ」という表現に変えているように、方定煥は最初から童話の形式を意識し、朝鮮の子どもたちが親しみやすいように表現や描写を朝鮮風に変えた翻案作品であった点である。

方定煥は、1922年の童話集『愛の贈り物』において、エドモンド・デ・アミーチス「クオレ」やオスカー・ワイルド「幸福の王子」等の世界名作童話を初めて朝鮮語で紹介したが、実は本書も出典は世界の名作童話であるが、翻訳底本は日本語に翻訳・翻案された童話作品であり、さらに方定煥独自の表現で書き換えられた翻案作品であった[vi]。このように、韓国児童文

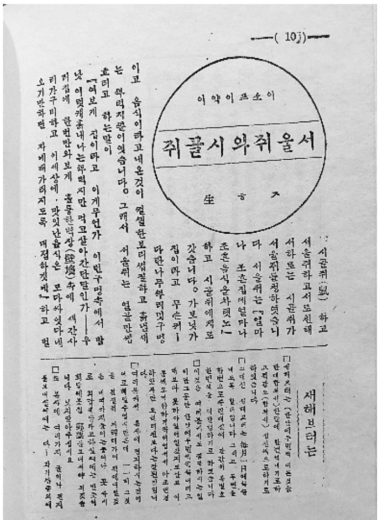

(10)
이소프이약이
서울쥐와시골쥐

図1　「ソウルねずみと田舎ねずみ」『オリニ』1924年1月号

学史の成立初期段階においては、1920年秋から東京に滞在していた方定煥による外国童話の日本語からの翻案作業があったことを把握しておきたい。以下に、方定煥の「ソウルねずみと田舎ねずみ」を拙訳にて全文掲載し、内容を検討したい。

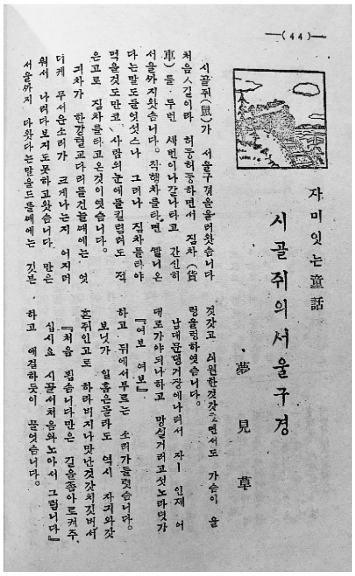
イソップイヤギ（おはなし）
ソウルねずみと田舎ねずみ
ㅊㅎ生（チウッヒウッ生）[vii]

田舎ねずみとソウルねずみがお互いに親しくて、ある日、田舎ねずみがソウルねずみを招待しました。ソウルねずみは、「どれだけ良い家にどれだけ良い食べ物を用意したのだろう」と、田舎ねずみのところへ行きました。行ってみると、家だというのは大きな木の根っこの下の穴だし、食べ物だといって出てきたのは、ざらざらした麦の皮と土の匂いがする根っこだけでした。それで、ソウルねずみは顔をしかめて、

「おいおい、家だというがこれは何だ。こんな穴の中で昼も夜もこんなに土の匂いのする根っこだけを食べて暮らすというのかね――わたしの家に一度来てごらんなさい。立派な押し入れの中に家具調度品がしつらえてあって、この世の美味しい食べ物はみんなありますよ。来てくれさえしたらあなたのお腹が裂けるくらい接待しましょう。」と言うと、さっと起き上ってそのまま田舎ねずみを連れてソウルの自分の家に行きました。田舎ねずみが見ると、まことに立派な押し入れの家で、色々と燦爛たる器が置かれており、梨、林檎、何種類かの果物と餅、飴、ありとあらゆる美味しい食べ物がどっさりとあって、見ただけで唾をごくりと飲み込みました。

「さあ、どうぞ好きなだけ召し上がってください」とソウルねずみが勧めるので、田舎ねずみも向かい合って座り、さあ食べよう、としたところ、突然押し入れの扉がぱっと開いて人間が棒切れを持って「この、ねずみめ！」と声を荒げるので、二匹のねずみはびっくりして慌てて暗くて狭い穴の中に逃げ込んで、息を殺していました。しばらくして、人がいなくなった様子を見て、そろりそろりと這い出して食べようとすると、また押し入れの扉が開いて人間が大声を出すので、また驚いて穴の中に逃げ込みました。こんなことを三、四回繰り返ししたからとうとう顔つきが険しくなって、胸が苦しくなったので田舎ねずみはさっと起き上って言いました。「わたしはもう行くよーーたっしゃでな。いくら押し入れのある家が良くておいしい食べ物がたくさんあっても、それは君のものではないし、人間のものを盗んで食べるなんてそんなの耐えられるかねーー田舎に帰って、汚い家でも我が家にいながら、麦の皮でも土の匂いのする根っこでも安心して食べるほうが何倍もおいしいし太れるよ」と言って田舎に帰っていきました。（拙訳）（『オリニ』1924年1月号、10－11頁）

日本語に翻訳したため、「押し入れ」などの訳語から日本式の押し入れや家屋を想起してしまうかもしれないが、原文では「ピョクチャン（벽장）」となっており、朝鮮の伝統家屋にある壁に作りつけた押し入れのような収納庫のことを指している。また、家ねずみ（町ねずみ）のことをソウルねずみと描写しているように、お話の舞台として朝鮮の風景が立ち上がるような言葉の選択になっているのが印象的である。しかし、簡潔なお話のプロットはイソップ寓話に従っているのが、この「イソップイヤギ（おはなし）/ソウルねずみと田舎ねずみ」の特徴である。


—(44)—

자미잇는童話

시골쥐의서울구경

夢見草

시골쥐(鼠)가 서울구경을 올라왓습니다 처음시길이라 허둥허둥하면서 짐차(貨車)를 두 · 두번 세번이나갈나타고 간신히 서울까지왓습니다。 직행차를타면 빨리 온다는말도 들엇스나 그러나 짐차를 타야 덕을것도 만코 사람의눈에 띄일염려도 적은고로 짐차를 타고 온것이엿습니다。

귀차가 한갈림고 다리를 건늘때에는 엇지 무서운소리가 크게나는지 어지러워서 나려다보지도 못하고 잣습니다。 만은 서울까지 다왓다는말을 드를때에는 것갓고 시원한것갓스면서도 가슴이 울렁울렁하엿습니다。

남대문정거장에나려서 자ㅣ 인제 어데로가야 되나하고 망설거리고 섯노라닷가 『여보 여보』

하고 뒤에서부르는 소리가 들렷습니다。 보닛가 일흔은 넘은 늘그신 할아버지가 맛난것처럼 벙서서 눈을 씀벅씀벅하면서 『처음 뵙습니다만은 길을 좀 가르켜주십시요 시골서처음 와노아서 그럽니다』

하고 애걸하듯이 물엇습니다。

図2　「田舎ねずみのソウル見物」『オリニ』1926年10月号

3. 翻案から創作へ――「おもしろい童話／田舎ネズミのソウル見物」

ところで、方定煥は、自ら「ソウルねずみと田舎ねずみ」というネーミングで翻訳したイソップ寓話がよほど気に入ったのであろうか、1924年にイソップ寓話として「ソウルねずみと田舎ねずみ」を『オリニ』誌に掲載した2年後の1926年には、再び『オリニ』誌に「ソウルねずみ」と「田舎ねずみ」を登場させた。『オリニ』1926年10月号に発表した「田舎ねずみのソウル見物」である。これには、<おもしろい童話>という語が添えられていた。「ソウルねずみと田舎ねずみ」は<イソップイヤギ（おはなし）>あるいは<寓話>とされていたのが、ここでは、<おもしろい童話>となっているのである。長くなるが、ここに拙訳にて全文掲載し、内容を検討してみたい。同じように<田舎ねずみ>が登場する2作品であるが、果たしてどこが同じでどこが違うのであろうか。

おもしろい童話

田舎ねずみのソウル見物

夢見草[viii]

田舎ねずみがソウル見物にやってきました。はじめての旅なので、うろうろしながら貨物列車を二、三度乗り換えて、どうにかソウルまでたどりつきました。直行列車に乗ったら早く到着できると聞いたけれども、貨物列車に乗った方が食べ物もあるし人間に見つかる心配も少ないので、貨物列車に乗ってやってきたのでした。

汽車が韓江（ハンガン）の鉄橋を渡るときには、どうしてこんなに恐ろしい音が大きく出るのかと、めまいがして下を見ることもできなかったのですが、もうソウルだ、という言葉を聞いたときにはうれしいようなせいせいするような気持で胸がわくわくしました。

南大門（ナンデムン）停留場で降りて、さて、これからどこへ行こうかと迷っていると、

「もしもし」

と後ろから呼ぶ声が聞こえました。

見ると、どなたか分かりませんが、やはり自分と同じねずみですから、おじいさんに会ったようにうれしくて、

「初めましてお目にかかりますが、道を教えてくださいませんか。初めて田舎から出てきたものですから」

と哀願するようにたずねました。

「さあて、最初から田舎から初めて上京されたお方だろうと推察しておりましたよ。ソウル見物にいらっしゃったのでしょう？」

「はい。死ぬ前に一度ソウル見物でもしようかと。待ちに待ったこの日がやってきて、どうにかここまで来るには来たのですが、来てみたらとてつもなく広いところで、どっちが南でどっちが北なのか見当も

つきません……。まずは旅館を見つけなくてはならないのですが、どの旅館がいいのか見当もつきません。先ずは猫のやつのいない旅館でなくちゃならないでしょう？」

「そういうことでしたら、旅館など行くこともなくて、わたくしと一緒にわが家にでもいらしてくださいな。そうしたらお金もかからないし、猫だって入って来られない家ですからねえ。四方がぐるりと鉄で囲まれた洋館ですからねえ」

「ええ？洋館ですか？それはご立派なお宅なのですねえ。では、ソウルに来たついでに、洋館見物もかねてお宅にお邪魔させてもらいましょうかねえ」

「どうぞご遠慮なく。それでは、わたくしについておいでなさい。迷子になりますよ」

田舎ねずみはようやく安心してソウルねずみの後についていきました。

「あの、ブーブー音を立ててやってくるのは自動車というものですよ。足を悪くした人や、歩けない人、そうでなければ大病を患った人が乗るものです。あっちにチンチン鳴らしながら家くらいのものが走ってきますが、あれは‘電車’というものですよ。お年寄りや子どもさんたち、身重の女性たちが乗るものです。5銭くらい払ったらだいたい10里くらいの距離は乗せてくれますよ。我々もあれに乗って行けたらいいのですが、わたしたちが乗ったらきっと踏みつぶされるにきまっていますから乗れないですよねえ」

「アイゴー、見物がてら歩いていくのがいいですよ。ところで、どこかで火事でもあったのですか？何か事件でも？どうして人々はあんなに大急ぎで走っているのですか？」

「火事だなんて、そんなことはないですよ。ソウルの人たちはもともとあんな歩き方なのです。ソウルに住んでいる人が、田舎の人みたいに煙草なんかのみながらひまそうにぶらぶらしていられますか？飢えて死んでしまいますよ。ああやって忙しく動き回っていても、それでもお金にならないことが多いのですから。それにまずは電車、馬車、自動車、自転車があんなに鉄砲玉のように行ったり来たりしているのだから、田舎のようにのんびりしていたらあっというまにはねられて死んでしまうのではないですか？」

「なるほど、そうですね。見ているだけでも目がぐるぐる回りますよ」

「さあ、あれが南大門（ナンデムン）です」

「アイゴー、まったくたいした大きさだ」

「あの門楼の上に登ってみてごらんなさい。どれだけ広いことか。我々には練兵場の運動場ほどもあるのですから良いには良いのですが、食べるものがないのですよ。そうなのです、何もないのです」

話を聞きながら、目をきょろきょろさせてソウルねずみのあとについてずいぶん歩きました。

「さあ着きました。真っ赤な洋館が見えるでしょう？あの家です」

見ると、本当に真っ赤に塗られた洋館がすっくとそびえ立っていました。

「まったくご立派なお宅ですなあ。ずいぶん真っ赤でございますねえ。あの上の黄金色は窓ですかねえ？」

「ええ。あれは窓にも使うし、大門として出入りするのにも使うものです。あれだけ高い場所にあって狭い門から出入りするのだから、猫のやつが来る心配は少しもありません」

「ははあ！そりゃあそうでしょうねえ」

「さあ、すべらないように急いで登っておいでなさい。私が先に行きますから、すぐについてきてくださいよ」と言うと、ソウルねずみはちょろちょろとよじのぼると黄金色の鉄の閉じている穴の中にすっと

入ってしまいました。田舎ねずみもよじのぼるのはもともと上手なものですから、すぐに後を追ってよじのぼると中に入ってしまいました。

「どうですか、広いでしょう？なんといってもほっとできるのは猫の心配がないことです。この中にこうして入って座っているとまったく天下泰平なものですよ。さあ、ゆっくりくつろいでください」

ソウルねずみがたいそう親切に、かゆい所に手が届くようなもてなしをしたものですから、田舎ねずみは申し訳ないと思いながらも、有り難く幸いに思いました。

田舎では見たこともない中華料理の残飯や、洋菓子のおこぼれのような食べ物をたくさん出してくれたので、おいしくいただくことができました。

ところが、その時、田舎ねずみの頭の上に何かすとんと落ちてくるものがありました。

びっくりして見ると、切手が貼ってある封筒でした。田舎ねずみがたいそう驚いたので、ソウルねずみはからからと笑いながら、

「そんなに驚くことはないですよ。こんな手紙はしょっちゅう落ちてきます。何も心配はいりません。そのうち寝るときに敷いたりかけたりするようにと落ちてくるものです。寝た後も夜が更ければ更けるほど、寒くならないようにとたびたび落ちてきて、ふかふかにしてくれるんです」と言って、今落ちてきたその手紙の封筒をつまんで、座布団の代わりに敷いて座りなさいと田舎ねずみに渡してくれました。

「それから、時々雨がひどく降ったりしたときに食べるものがなくなると、糊がたっぷりついた封筒をかじって食べたりもするのですよ」

こんな話をしている間に、こんどは新聞紙をきちんと折って束ねたものが落ちてきました。

「この手紙はずいぶんと大きいですなあ」と田舎ねずみがソウルねずみを見て言いました。

「いえいえ、これは手紙ではなく新聞というものですよ。この世の中で起きることなら何でもこの中に記されているそうです。どれどれ、何が書かれているか、ちょっと読んでみましょうか？」というと、新聞を広げて眺めたかとおもうと、

「えい、いまいましい！黒死病が流行るってんで、我々をみんな捕まえて殺さなくっちゃあって、ずいぶんまあ大きく書かれたもんだ……」

「アイゴーー、そりゃあ大変だ。無駄に上京しちまったもんだ！やられちまったらどうしたものか」

しばらくして、夜が明けて辺りが白み始めた頃でした。

ガサゴソと頭の方でおかしな音がしたと思ったら、田舎ねずみは新聞紙の布団の中で目を覚ましてびっくり仰天しました。とんでもないことが起きたのです。

突然頭の辺りにあったそれまで閉じていた黄金色の門が外側に開き、大きな人間の手がぬっと入ってきたかと思ったら、そこにあった手紙や葉書や新聞紙をきれいさっぱりかき集めて、たいそう大きな鞄の中に詰め込んでしまったのです。

新聞紙の布団の下にうずくまっていた田舎ねずみも一緒にかき集められて鞄の中に入れられてしまい、パチン！と鞄の金具が閉じられてしまいました。

なにがなにやら分けが分からない田舎ねずみは、こうして鞄の中に詰め込まれてしまいました。どこへ行くのやら、どうなってしまうのやら恐ろしく、窮屈さに息もつまったので、ガリガリ、ガリガリ、と鞄の皮をかじって穴をあけると、顔をそっと出して辺りの様子をうかがいました。

田舎ねずみが閉じ込められた鞄は、なにやらカーキ色の帽子をかぶってカーキ色の上着を羽織った人間の肩にかけられ、その人のお尻のところあたりにぶらさがったまま、今、どこかに向かっているところでした。

まだ朝早いにもかかわらず、ソウル南大門の中はずいぶんと人通りが激しかったです。

路面電車がチンチン！と走り、人力車があちこち駆け回り、自転車がチリンチリン！と走り抜け、馬車を引く馬やどうという仕事もない犬まで、せわしなく走り去ってはまたやって来たりしていました。

「いったいぜんたいソウルってところはたいそう大きくて良いには良いが、ずいぶんと忙しいところだ！」と田舎ねずみが考えているところに、いつのまにやら自分を運んでいるカーキ色の服を着た男は、ある大きな、今度こそは南大門停留場のように大きなレンガの建物の裏口にすっと入って行きました。

中に入ると、まるで土で汚れた藁束でも捨てるように、鞄に入れて運んできた手紙を大きな籠のなかにぶちまけました。

「うわあ、ねずみだ！ねずみ！ねずみが郵便鞄の中から出てきたぞ！」と

カーキ色の服の男が大声を出したものだから、何人かいた事務員たちは、

「どこだ？」

「どこだ？」と集まってきて、田舎ねずみを捕まえようと大騒ぎになりました。

しかし、ねずみは幸いなことに捕まらずに、どうにかこうにか逃げ出して縁側の下に隠れました。

「ああ、ソウルは恐ろしい、恐ろしいところだ！ソウルねずみは親切だけど、洋館も恐ろしいし、黒死病も恐ろしい。エイッ、鞄の穴からのぞきながらソウル見物はそこそこできたんだから、とっとと退散だ。退散だ」と言って、その日のうちに田舎に戻ってしまいました。（拙訳）（『オリニ』1926年10月号、44－49頁）

「田舎ねずみのソウル見物」は、方定煥の創作童話である。田舎ねずみとソウルねずみの二匹がメインキャラクターであるのはイソップの「ソウルねずみと田舎ねずみ」と同じであるが、ここでは、面識のなかった田舎ねずみとソウルねずみが、田舎ねずみの上京によって偶然出会うところから始まる。田舎ねずみが貨物列車を乗り継いでソウル見物にやってくるところからこの<おもしろい童話>は始まる。

貨物列車を乗り継ぎ、田舎ねずみが最初に踏んだソウルの地は、南大門停留場である。現在のソウル駅、正確に言うと現在のソウル駅の隣に史跡として保存されている旧ソウル駅舎である。この作品が『オリニ』誌に発表された1926年当時は、ソウルは京城[ix]と呼ばれ、南大門停留場はすでに京城駅と名称変更[x]されていた。さらに近代的な赤煉瓦の駅舎も建設されていた[xi]。京城駅舎は東京駅に次ぐ規模を誇るものだったので、当時の朝鮮においてその近代建築物としての威光はいかほどのものだったであろうか。東京駅を設計した辰野金吾の弟子筋である塚本靖の設計である。

ソウルは、朝鮮王朝時代は漢城（ハンソン）と呼ばれ、現在もソウルを南北に分ける大きな河、漢江（ハンガン）の北側に都を構えていたが、1900年にこの漢江に初めての鉄橋がかけられたことで、ソウルから釜山に至るまで鉄道が走るようになったのである。それまで、人や物はすべて舟を使ってこの漢江を渡っていたことを考えると、鉄道と鉄橋は大転換する時代の象徴、近代の象徴にほかならない。田舎ねずみは、生れて初めて渡る鉄橋についてこう述べている。

汽車が韓江（ハンガン）の鉄橋を渡るときには、どうしてこんなに恐ろしい音が大きく出るのかと、めまいがして下を見ることもできなかったのですが、もうソウルだ、という言葉を聞いたときにはうれしいようなせいせいするような気持で胸がわくわくしました。（拙訳）（『オリニ』1926年10月号、44頁）

ここでいうソウルとは、＜都＞という意味で、実際、朝鮮の人々にとっては地名の漢城もソウル（都）であるし、京城もソウル（都）である。

ところで、この田舎ねずみの目を通して描かれるのは鉄道と鉄橋に始まり、路面電車、馬車、自動車、自転車が「鉄砲玉のように」行ったり来たりしている様子である。田舎ねずみは、初めて目にする近代文明に度肝を抜かれる。

……。ところで、どこかで火事でもあったのですか？何か事件でも？どうして人々はあんなに大急ぎで走っているのですか？」

「火事だなんて、そんなことはないですよ。ソウルの人たちはもともとあんな歩き方なのです。ソウルに住んでいる人が、田舎の人みたいに煙草なんかのみながらひまそうにぶらぶらしていられますか？飢えて死んでしまいますよ。ああやって忙しく動き回っていても、それでもお金にならないことが多いのですから。それにまずは電車、馬車、自動車、自転車があんなに鉄砲玉のように行ったり来たりしているのだから、田舎のようにのんびりしていたらあっというまにはねられて死んでしまうのではないですか？」

「なるほど、そうですね。見ているだけでも目がぐるぐる回りますよ。」（拙訳）（『オリニ』1926年10月号、46頁）

道行くソウル（都）の人を見て、どうして人々はあんなに大急ぎなのか？火事か事件かと驚く田舎ねずみに対して、ソウルねずみは、「ソウルに住んでいる人が、田舎の人みたいに煙草なんかのみながらひまそうにぶらぶらしていられますか？飢えて死んでしまいますよ。ああやって忙しく動き回っていても、それでもお金にならないことが多いのですから」と説明する。ここでは、ソウルねずみは近代生活の代弁者として登場し、田舎ねずみの案内役となっているが、近代文明は忙しくお金を稼がないと飢えて死んでしまう、というように、方定煥の文明批評がうかがえる。鉄橋は恐ろしい音を立てるし、自動車や自転車は鉄砲玉のようで、「田舎のようにのんびりしていたらあっというまにはねられて死んでしまう」ともソウルねずみに言わせている。

それから、ソウルねずみは田舎ねずみを自分の家に案内する。田舎のねずみと都会のねずみが出てきて、自分の家に招待するところは、イソップ寓話をモチーフにしている通りである。しかし、ここでも方定煥は、近代文明を風刺している。郵便ポストのことを「洋館」と呼び、田舎ねずみに「新聞」を教え、ニュースを伝える。そして、郵便ポストで一夜を明かした田舎ねずみは郵便配達夫によって郵便局まで運ばれてしまう。郵便制度も近代の象徴に違いなく、郵便局のことは、「南大門停留場のように大きなレンガの建物」と言っている。京城郵便局のことである。

このように、方定煥は、1924年に「ソウルねずみと田舎ねずみ」でイソップ寓話を多少の朝鮮風の表現を使いながらもそのまま翻案紹介したのに対して、1926年の「田舎ねずみのソウル見物」では、「ソウルねずみ」と「田舎ねずみ」のキャラクターを活用しながら「おもしろい童話」を創作し、近代文明を風刺したといえる。

4.「新しく開拓される「童話」に関して」

方定煥が外国童話の翻案作業を開始した思想

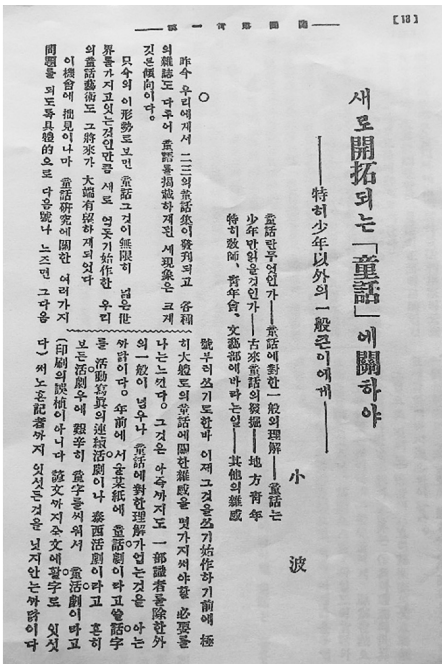

[18]
――開闢第一號――
새로開拓되는「童話」에關하야
――特히少年以外의一般론이에게――
小波
童話란무엇인가――童話에對한一般의理解――童話는少年만읽을것인가――古來童話의發掘――地方青年特히敎師、青年會、文藝部에바라는일――其他의雜感
○
昨今우리에게서 二三의童話集이發刊되고 各種의雜誌도 다투어 童話를揭載하게된 새現象은 크게 깃븐傾向이다。
只今의 이形勢로보면 童話그것이 無限히 넓은世界를가지고있는것인만큼 새로 엇돗기始作한 우리의童話藝術도 그將來가 大端有望하게되엇다
이機會에 拙見이나마 童話硏究에關한 여러가지問題를 可도록具體的으로 다음號나 느즈면 그다음號부터 잇잇단) 써노흔記者까지 잇시는것은 닐지안는바이다
號부터 쓰기로한바 이제 그것을쓰기始作하기前에 極히大雜把로 童話에關한雜感을 몇가지써야할 必要를 나는느낀다。 그것은 아직까지도 一部識者를除한外의一般이 넘우나 童話에對한理解가 업는것을 아는 바이다。 年前에 서울某紙에 童話劇이라고 童話字를 活動寫眞의連續活劇이나 泰西活劇이라고 흔히 보는活劇우에 艱辛히 童字를써워서 童活劇이라고 (印刷의誤植이아니다 該文까지全文에 활字로 잇잇단) 써노흔記者까지 잇시는것은 닐지안는바이다

図3　「新しく開拓される「童話」に関して」『開闢』1923年1月号

に関しては、1923年1月に『開闢』誌に書いた「新しく開拓される「童話」に関して」の中で表明している。この文章は、方定煥の「童話」認識を知ることができる重要な論説であり、近代朝鮮初の「童話論」であると思われるので、長くなるが以下拙訳にて全文紹介する。なお、著者として「小波」と表記されているが、これは方定煥が何種類か使っていた筆名のうちの一つで、韓国児童文学史では方定煥を示す最も重要な雅号として一般的にもよく知られているものである。近代日本文学史の重要人物である巖谷小波との筆名の一致については多くの研究者が言及している[xii]が、果たして偶然の一致なのか、巖谷小波を意識してのものなのか、意識していたのならどういう思いで日本の児童文学者の筆名と同じにしたのか、早逝した方定煥自身言及していないため真相は不明のままである。

新しく開拓される「童話」に関して――特に少年以外の一般の人に――

小波

童話とは何か――童話に対する一般の理解――童話は少年だけが読むものか――古来童話の発掘――地方青年特に教師、青年会、文芸部に望むこと――その他雑感

○

昨今私たちに二、三の童話集が発刊され各種の雑誌も童話を掲載するようになった新しい現象は大変うれしい傾向である。

只今のこの形勢から見ると、童話が無限に広い世界を持っているのと同様に新たに芽生えた我々の童話芸術もその将来が明らかに有望となった。

この機会に拙見ではあるが童話研究に関する様々な問題をできるだけ具体的に次号や遅くてもその次の号から書くこととするが、今、それを書き始める前に極大雑把に童話に関する雑感をいくつか書かなくてはならない必要を私は感じている。それは、いまだに一部識者を除く一般がとても童話に対する理解が無いことを知っているからである。以前ソウルの某紙に童話劇と書くべき話の字を活動写真の連続活劇だとか泰西活劇と一般に見られている活劇の上にどうにか童の字を書いて童活劇というように(印刷の誤植ではなく諺文まで全文、活の字になっていた) 書く記者までいたことを忘れられないからである。

○

ある民族においても、ある国家においても、あるいは世界人類においても、すべての新しい思想新しい事業は、常に新しい人物の頭脳から生じ、またその手から成されるものであり、その新人は必ず少年の世界から出てくるものであることは、ここに改めて書くこともないであろう。

○

童話はその少年――児童の精神生活の重要な一部分であり、最も喫緊な食物だ。文化的に進化した現代においては、我々の人間的教養の一要素として芸術が絶対的に必要なものであるように、現代の児童にはその人間的生活の要素として童話が要求されるのである。

○

童話の童は児童の童で、話は説話であるから、童話というのは児童の説話、あるいは児童の為の説話である。従来、我々民間では一般に児童に聞かせるはなしを「イェッイヤギ（昔話）」というが、それは、童話は特に時代と場所に拘束されず、大概その初頭が「むかしむかし」で始まることから、童話というと「昔話」と思われやすいわけであるが、決して昔話だけが童話なのではなく、ただ「イヤギ（おはなし）」というのが妥当であるだろう（「イヤギ（おはなし）」の語源に関しては興味深い話があるが、それは次回詳細を書くこととする）。

この童話というものはどういうものかということに対しては、もう少し詳細に言うと、童話の形式と内容を取り上げてその性質を述べ、その起源と発達の経路を探し、童話と異なる類似のものとの区別をし、さらに一歩先に行って純科学的立場から童話を観察するならば、童話の分類にまで立ち入りその比較研究を行わなければならない。そのためそれは勿論次号に順を追って書くのであるが、大まかな見地からすると、すなわち童話というものは、誰もが知っている「お日さまとお月さま」「フンブとノルブ」「コンチュンイ　パッチュンイ」「ピョルチュブ（鼈主簿）（兎の肝）」等[xiii]のようなものだと思ってもよいだろう。

○

童話が児童に与える利益は決して二、三に止まらないが、ただ教育上有効な点だけで見たとしても、童話によってその情意の啓発を速め、理智の判断を明敏にするばかりでなく、多くの道徳的要素によって徳性を育て他に対する同情心、義侠心を豊かにし、あるいは種々の超自然、超人類的要素を包含した童話によって宗教的信仰の基礎まで与えられるなど、実にその効力が偉大なものである。ところがこれらの教訓、有益は世の教育者または宗教家等、児童以外の指導者である童話利用家の云々することろであり、決して教訓だけが童話の正面の目的であるのではない（これも後に詳述する）。

それから、児童自身が童話を求めることは決して知識を求める為ではなく、修養を求める為でもなく、おおよそ本能的な自然の欲求である。乳飲み子が母乳を欲求するように児童は童話を欲求するもので、母乳が幼児の生命を育む唯一の食物であるのと同じように童話は児童に最も貴重な精神的食物である。

童話がどの時代のどの場所のものであっても、それが無いところはなく、時代が下がるにつれてその世界を広げていく所以は、実に世界全般の児童の生活に不可欠な精神的食糧として本能的、自然に欲求されるからである。見よ、風土・気候・風俗の関係から取り扱われる内容の材料は違っても、如何なる文明国にも、如何なる未開民族にも、童話の世界にはいつも変わらず花が咲いているのを見よ。

○

古代からただ説話―― 一つの話としてだけ扱われてきた童話は近世に至って「童話は児童性を失わない芸術家が再び児童の心に入ってある感激――あるいは現実生活の反省から生じた理想――を童話の独特な表現方式を借りて読者に呼び掛け訴えるものだ」と考えるまで進歩してきた。

そのため少なくとも近世に至って芸術家

の筆によって創作された童話に現れた思想と世界は作者の理想の世界と見ることができるものである。一般児童に難解な点で避難する点はあるが、英国オスカー・ワイルドの童話と白義耳メーテルリンクの童話を読むとさらにこの考えにいたる。

○

童話は人生の洗練された再現だとすれば、童話は立派な完全なる芸術である。

○

童話の相手（あるいは読者）は勿論児童である。

しかし、だからといって児童以外の青年、壮年、老人――即ち一般の人には全然没関係なのであろうか……。この点に関しては前項に書いたことがすでにある説明的暗示を投げかけていると考えるが、またいくつか書かなければならないようだ。

事実として、朝鮮では童話という童の字だけを見てすでに一部の識者以外のほぼ一般的には知らん顔をしてきた。多少民間に読まれてきた興夫伝やあるいは鼈主簿伝や朴天男伝等が童話でないということではない。それらは営利の為の冊子商人が適当でない文句をむやみに乗せた上に所謂小説体に作り上げ、古代小説という冠をつけて廉価で売りっぱなしにしたことから冊子の内容も童話の資格を失って久しく、それを買った人も童話と思って読んだのではなく、古代小説として読んだものであった。それは、これまでの我々は誰も童話を研究する者がいなかったのと、誰も童話をして一般に向けて見せたり説明したりする者がおらず、実に無知なまでに童話に対する理解を持てなかったからである。

前項で述べたように、童話は、永遠なる児童性を失わない人類の中の一人である芸術家が再び児童の心に入ってある感激――あるいは現実の生活を反省するときに生じるある感じを読者に呼び掛け訴えるものならば、その感激、その反省は世の中のすべての人の感激、反省でなくてはならない。いや、その作品によれば誰もが感激の洗礼を受けざるを得ないものである。あるいはその作品によって誰もがみな各自の生活を反省せざるを得ないものである。

西洋のある哲人は、「現代の急務は、児童をしてその父母を教育させることにある」と言ったという。有理な言葉をいくら言っても足りないくらい有理な言葉だ。一般の人が児童に注意したりあるいは接近することは、結局自己自身の反省となるものだし、また教育になるものである。

我々は誰もが持っている「永遠の児童性」をこの児童の世界に保持しなければならない。さらに洗練させなければならない。我々はその美しく清らかな故郷――児童の心に戻ることに力を注がなければならない。

児童の心！真に我々が暮らす世の中で児童時代の心のように自由に羽を広げられるものはないし、また純潔なものはない。そのため、我々は年齢を重ねていけばいくほどそれを少しずつ失い始め、その代わり様々な経験をするようになり、様々な複雑な知識を持つようになる。しかし、その経験と知識だけを持ったとしても、それでもって何をするのか。経験そのものが無益なものではなく知識が無益なものではない。しかし、それだけが増えていくことは決して美しい人生として自慢できるものにはならない。しかもその経験その知識が増えていく間に、一方ではその純潔できれいな感情が消滅してしまったのなら、我々はどうすればいいのか……。その人はただ冷たく枯れて凍った知識の所有者であるだけで、人生としてはただ堕落した者でしかない。

ああ、我々は常に天真爛漫な昔の故園――児童の世界……に戻り、心の純潔を祈らず

にはいられない。

「美しい花を見てああ美しい！と理由なく飛びつく子どもが私はかわいいというだけでなく、そこに深い意味があるものと私にとっては考えに至ります」

と日本の童話作者小川氏は言った。果たして、全くもって児童の世界はどう形容することもできない美しい詩の楽園であり、同時にどう覗くこともできない崇厳な秘密の王国のようである。

○

この美しい楽園、崇厳な王国！そこを世界人類誰もが通過するのである。

そして誰の人生にもすべておのれが出生した故郷があるのと同じように、またその故郷の景色とすべてのことを永久に忘れられないのと同じように、人生は誰にとっても一度だけそうした児童の時代、そうした世界を通過し、その時のすべてのことを永久に忘れることができない。

三十歳になっても四十歳になっても、また七、八十歳になっても、いつにおいても人生は幼いころの楽園を忘れることができず、懐かしがるはずだ。それを懐かしがる心は即ち、汚れない限り純潔と無限の自由の世の中を憧憬する心である。現実生活の反省も理想の向上もこの心から現れ若い友達、将来未来の人生に対する愛と希望もこの心から現れるものである。しかも童話はこの心から広く真実のものが現れるものである。

ああ童話芸術！すべての大人たちもこれに接することが嫌な者がいるだろうか。

○

以上の意味から童話は決して年齢を標準に少年少女だけに読ませるものではなく、広く人類がみな一緒に読むもので、作者も常に大人が子どもに与える童話を書くのではなく、人類が持っている「永遠なる児童性」のための「童話」として書くものである。

このため、私たちが一生をかけて憧れ憧憬する児童時代の温かい故園に入ることができるのは、ただ児童芸術によるしかない。童話は児童芸術の重要な一部分である。我々が我々の一生を通してただこの童話の世界でだけ児童と一般の人が「一つに交わる」ことができる。この世界でのみ大人の魂と児童の魂との間に少しも差別はなくなるのである。

もう少し理解をもって、もう少し真実な態度で、一般の人が童話に注意を向けてくれることを私は望む。

○

朝鮮で童話集として発刊されたものは、韓錫源氏の『雪の花』と呉天錫氏の『金の鈴』と拙訳『愛の贈り物』があるだけだ。そしてそれ以外に童話に筆を染めた人に上海の朱耀燮氏がいる。

童話を研究しまた創作する同志がもう少し増えてくれることを切に望んでいる。

○

いまだ我々には童話集が何冊か、また童話が雑誌に掲載されてもたいがい外国童話の翻訳に過ぎなく、我々の童話としての創作が見えないことは少々寂しいことであるが、だからといって落胆することはない。他の文学同様童話も一時期の輸入期は必然としてあるもので、また、初めて鍬をもった我々はまだ創作に汲々とするよりも我々の古来童話を掘り起こし、一方では外国童話を輸入して童話の世界を広げ材料を豊富にすることに努力することが順序であるように思う。

○

外国童話の輸入よりも最も重要で緊急な――我々の童話の舞台の基礎となる古来童話の発掘が何よりも難事である。これこそ実に難中の難事である。

世界童話文学界の重賓といわれる独逸のグリム童話集はグリム兄弟が五十余年もの

長い歳月をかけて各地方を訪ねながら苦労を重ね集めたものだそうだ。日本では明治の時に文部省から日本固有の童話を纂集するために全国各府県当局から各其管内の各小学校に命じてその地方ごとの過去及び現在において口伝された童話を集めようとしたが成功せず、近年また民謡と童話を募集しようとしたが、政府の予算削減が原因でまた不成立となったという。

このような他の例を見ると、古来童話募集が如何に難事であるかを斟酌することができる。

しかも政府だとか文部省だとかいう信じられる機関も持たない我々は他の五十年事業に百年を費やしても我々は我々の力でこの仕事に着手せねばならない。

この難中の難事であることに関わらず、開闢社がこの志を理解し、快く今回古来童話募集の快挙に出た誠意は無限なる感謝しかない。それから、また、この意味ある仕事に応じ純粋童話発掘に助力してくれる応募者諸氏にも私は感謝するばかりである。

まもなく彼らの原稿は私のもとに来るはずである。それからその中でもたくさんの宝玉となる童話を得ることができることを私は嬉しい思いで待っている。

○

しかし、決して今回の最初の事業で満足した結果を得ることができるとは考えていない。今回の最初の経験に続いて、このような機会がたびたび生じなければならないということを私は分かっている。各雑誌が可能ならばみなこの募集欄を設けることを望み、新聞も毎日二段程度でできることだからこの事業に着手してくれたら効果が大きいだろう。

しかし、それよりも私にとって第一の希望を言うと、各地方にいる青年である。各地の学校に勤務している教師や各青年会の文芸部員、あるいは銀行員、金融組合員、役所に勤めている者などの諸氏が、仕事の合間にできることなので、少し意識して懸賞募集に応じたりあるいは雑誌社に送ったり新聞に発表してくれたら、少しの努力でたくさんの収穫が得られるだろう。

我々は、我々各自が協力してこそ他に負けない宝玉となる我々の童話を発掘しなくては、永久に我々の童話は発掘されずに埋もれてしまうだろう。

重ねて、地方に住む諸氏にこのことを望む。

○

日本童話として欧羅巴各国に翻訳されている「猿の胆」という有名な童話は其の実日本固有のものではなく、朝鮮童話から翻訳されたもので、朝鮮の鼈主簿の兎を猿に直しただけだ（東国通史を見ると朝鮮固有のもののようではあるが、もしかすると印度から来たものではないかとも思われ、いまだ明確には分からない）。そのほか、「こぶとり」（こぶ爺さんがトッケビにこぶを売ったのだが、翌日別のこぶ爺さんがこぶを売りに行ったらこぶを二個付けられて戻ってくる話）も朝鮮から日本に行ったものだ。ところが、こぶとりの話は独逸、伊太利、仏蘭西等色々な国にあるというのだが、西洋のこぶとりの話はこのこぶが顔面にあるのではなく、背中にあるというのだから、背むしの話に変わるというのも興味深いことだ。この他に日本古書（宇治拾遺物語）という冊子にある「腰折れ雀」という童話も朝鮮の「フンブ　ノルブ」の訳であることは明らかである。

○

童話は実に限りなく広い世界を持っている。したがってそれくらい研究も多方面に関係を持っている。

大概、童話研究には三方面があるのであるが、一、心理学的方面の研究。一、芸術的方面の研究。一、伝説学的方面の研究。

以上三方面だという者もいるが、その説の可否は如何であるか。その研究の方面がひどく広漠なものであることは事実である。

いくらやっても一人の力では到底完全な研究を成し遂げるのは難しいということを切に感じる。一人ずつでもさらに同志が増え、さらに可能ならば何か会合を持つことができれば良いだろう。

そうすれば、童話の普及上宣伝の力も生まれるだろうし、児童教育、少年の指導にも新しい道が開けるだろう。そして童話自体はどんどん成長していくだろう。

そうなればあの有名な「青い鳥」や「ハンネレの昇天」等と同じ童話劇を一般に向けて見せることも難しいことではないだろう。

○

どちらにせよ、只今のこの形勢から出ていくならば、童話の将来は大幅に有望なものであると考える。これからは、一つずつ童話研究に関することを書いていくこととしよう……（十一月十五日）（拙訳）（方定煥「新しく開拓される「童話」に関して――特に少年以外の一般の人に――」『開闢』31号、1923年1月、18－25頁）

この、方定煥「新しく開拓される「童話」に関して」は、日本の高木敏雄（1976～1922年）と小川未明（1882～1961年）を踏まえての論述である[xiv]。例えば、「童話の童は児童の童で、話は説話であるから、童話というのは児童の説話、あるいは児童の為の説話である。」という部分は、高木敏雄の『童話の研究』（婦人文庫刊行会、1916年）に同じ記述がある[xv]。

さらに、＜童話は「永遠なる児童性を失わない芸術家」が「独特な表現方式を借りて」書いた「人生の洗練された再現」であり、「立派な完全なる芸術」であるから、「その美しく清らかな故郷――児童の心」「純潔できれいな感情」「天真爛漫な昔の故園――児童の世界」に戻り、心の純潔を祈らなくてはならない＞と方定煥は述べているが、これも小川未明の言説と類似している。「「美しい花を見てああ美しい！と理由なく飛びつく子どもが私はかわいいというだけでなく、そこに深い意味があるものと私にとっては考えに至ります」と日本の童話作家小川氏は言った。」と具体的に小川未明の名前も挙げ、最後に「児童の世界はどう形容することもできない美しい詩の楽園であり、同時にどう覗くこともできない崇厳な秘密の王国のようである。」とまとめた。

方定煥が東京に滞在した1920年～23年ごろは、高木敏雄、小川未明のほか、松村武雄『童話及び児童の研究』（培風館、1922年）なども刊行されており、童話に関する言説に多く接することができる環境だったといえる。方定煥による朝鮮初の童話宣言ともいえる「新しく開拓される「童話」に関して」（『開闢』1923年1月）は、方定煥の東京生活抜きにして語ることはできないだろう。

なお、本稿では、「新しく開拓される「童話」に関して」の後半で触れられている朝鮮古来の昔話に関する方定煥の業績について触れる紙幅がないが、「こぶとり」や「腰折れ雀」が朝鮮由来の昔話であるだろうという指摘は、やはり高木敏雄の『童話の研究』（1916）ですでに述べられている[xvi]。やはり、方定煥は、「新しく開拓される「童話」に関して」を書くにあたって、高木敏雄の『童話の研究』を手元に置いていたことは間違いないだろう。

5. おわりに

1919年の3・1独立運動後、1920年秋から渡日し、東京に滞在しながらした児童人権運動、朝鮮児童文学・文化の創立運動を推進した方定煥であったが、それは同時に、植民地下の朝鮮にあっては、主体的人権の尊重とは、すなわち民族主権の奪回を目指した民族独立運動を意味するものでもあった。そのため、方定煥は

2017年5月に大韓民国国家報勲処から「5月の独立運動家」に選定されている。

このように、民族独立運動の視点で近代史に名を遺す方定煥であるが、特に韓国児童文学史においては、近代童話の概念を確立させ、児童文学の地平を開いた人物として重要である。本稿では、その童話観を知ることができる論考、「新しく開拓される「童話」に関して――特に少年以外の一般の人に――」（1923年、『開闢』1月号）を検討し、方定煥が、朝鮮に新しく児童文学の地平を拓くにあたっては、その初期段階において世界の名作童話を受け入れることと、朝鮮古来の口承伝承（昔話）の収集が重要であると述べていることを把握した。

この朝鮮初の「童話論」は、日本の同時代の代表的神話学者、民俗学者だった高木敏雄と童心主義、芸術的童話文学を牽引した小川未明の言説を多く受容していることを確認し、この童話論が発表された翌年に紹介されたイソップ寓話「イソップイヤギ（おはなし）／ソウルねずみと田舎ねずみ」（1924年、『オリニ』1月号）と、1926年に発表された創作童話、「おもしろい童話／田舎ねずみのソウル見物」（1926年、『オリニ』10月号）を検討しながら、具体的に方定煥の翻案作品と創作作品の比較を通した総合的な童話考察を試みた。

「ソウルねずみと田舎ねずみ」では、朝鮮の子どもたちに親しみやすいように朝鮮文化に適合した語彙に置き換えた翻案をしており、このイソップ寓話からモチーフを得た「田舎ねずみのソウル見物」では、田舎ねずみとソウルねずみのキャラクターこそ登場するが、イソップ寓話のような翻案紹介の枠を大きく離れ、方定煥によるユーモアを交えた近代文明批判が盛り込まれた風刺的な創作童話になっていることが分かった。

論考、翻案、創作、さらには雑誌の主幹と、幅広い役割を一人でこなした方定煥は、一つの雑誌に同じ作者名がいくつも並んでしまうのを避けたためか、あるいは朝鮮総督府からの検閲で一網打尽になることを避けながら多様な表現形式で多様な言説を世に問うことができるようにしたためなのか、数種類の筆名を使い分けていた。

例えば、本稿で取り扱った論説文「新しく開拓される「童話」に関して」（1923年、『開闢』1月号）は「小波（ソパ）」名で発表されたものである。イソップ寓話の翻案作品「イソップイヤギ（おはなし）／ソウルねずみと田舎ねずみ」（1924年、『オリニ』1月号）は、「ㅈㅎ生（チウッヒウッ生）」という筆名、「田舎ねずみのソウル見物」（1926年、『オリニ』10月号）や「万年シャツ」（1927年、『オリニ』3月号）などの創作作品は「夢見草（モンギョンチョ）」という筆名で発表された。そのほか、風刺的な作品を書く時には「은파리（ウンパリ／銀蝿）」、詩を書く時には「잔물（チャンムル／穏やかな波）」[xvii]、探偵小説の「七七団の秘密」では「北極星（북극성）」を使った。

本稿では、方定煥による朝鮮初の童話論を検討しながら、外国童話の輸入から始めた朝鮮の新しい童話の世界の開拓というものがどのように創作童話へと展開していったかをイソップ寓話の「家ねずみ　野ねずみ」をモチーフにした翻案作品と創作作品の二作品を比較しながら検討した。

ここで確認できたことは、世界の童話に学びながらも朝鮮文化を大切にする方定煥の民族主義と、近代文明や都市生活についてユーモアを交えて風刺する方定煥独自の批判精神である。以下、方定煥の年譜を整理しておく。

資料：「方定煥年譜」

＊（韓国）方定煥研究所「方定煥年譜」（방정환『서울 쥐의 서울 구경』길벗어린이, 2019, pp.46－47）を参考に作成

1899年	夜珠峴（야주개）（（ソウル）慶熙宮、フォーシーズンズホテル前に碑がある。現在、鍾路区唐珠洞）で魚と穀物を仕入れて販売する方慶洙の長男として誕生。
1905年（7歳）	私立普成小學校幼稚班入学。
1908年（10歳）	オリニ演説討論会「少年立志会」活動。 友達たちと石油缶で作った黒板をかけて討論会を進行。
1909年（11歳）	梅洞普通學校入学（現在のソウル市鍾路区通義洞）。 翌年、渓洞初等學校（西大門区にあった公立初等学校として1896年開校。西大門区忠正路52）に転校、1913年卒業。
1913年（15歳）	善隣産業学校入学。 1914年に卒業予定のところ、1年前に中退。
1915年（17歳）	総督府土地調査局写字生として就職。月給5ウォン。 ＊写字生：文字を写し書きすることを職業とする人。
1917年（19歳）	天道教3代教主孫秉熙の三女孫溶嬅と結婚。
1919年（21歳）	1月、青年文芸雑誌『新青年』発刊。 3・1運動を初めて報道した『朝鮮独立新聞』が刊行できなくなると、謄写版で印刷して配布していたところ日本の警察に捕まって拷問を受け1週間ぶりに釈放される。
1920年（22歳）	6月、月刊総合誌『開闢』創刊号に発表された小説「遺犯」の一部内容が朝鮮独立を暗示しているという口実で検閲で削除される。 8月、普成専門法学科の学生の身分で、「朝鮮学生大会巡回講演団」として活動。秋ごろ渡日。
1921年（23歳）	「天道教青年会」東京支会会長となる。（東京）東洋大学聴講生。 5月1日、天道教少年会設立。 「凛々しくて真正な少年になりましょう。そしていつもお互いに愛し合い助け合いましょう」
1922年（24歳）	5月1日、「オリニエナル（어린이의 날／こどもの日）」宣布、創立記念式開催。 7月7日、『愛の贈り物』開闢社から出版。
1923年（25歳）	1月、方定煥（小波）「新しく開拓される「童話」に関して――特に少年以外の一般の人に――」『開闢』31号23頁発表。 3月、児童文芸誌『オリニ（어린이）』開闢社から創刊。 5月1日、東京で「セクトン会（색동회）」創立発会式。朝鮮では「少年運動協会」名義で「第一回オリニナル（어린이날／こどもの日）」開催。
1924年（26歳）	1月、方定煥（ㅈㅎ生）「イソップイヤギ（おはなし）／ソウルねずみと田舎ねずみ」（『オリニ』1月号）発表。
1925年（27歳）	11月、オリニ新聞発行。 1931年9月までの6年間、『オリニの世界』全46巻発行。
1926年（28歳）	10月、方定煥（夢見草）「おもしろい童話／田舎ねずみのソウル見物」（『オリニ』10月号）発表。

1927年 （29歳）	「オリニと職業」という題目でラジオ放送。
1928年 （30歳）	10月、世界20か国参加の国際的オリニ芸術行事「世界児童芸術展覧会」開催。
1929年 （31歳）	1月、『オリニ』新年号「朝鮮13道古跡探勝盤」付録制作。 3月、『オリニ』創刊6周年記念号、「朝鮮自慢号」発行。「朝鮮自慢盤」付録制作。
1930年 （32歳）	3月、『オリニ』創刊7周年記念「朝鮮第一号」発行。
1931年 （33歳）	7月17日、持病の腎臓炎と高血圧が悪化して京城帝国大学附属病院入院。 7月23日、午後6時45分、33歳で死去。 「オリニをおいて行くからどうか頼んだ」と遺言。 7月25日天道教堂前で告別式挙行。少年らが「オリニの友」方定煥の死を哀悼する。

＊本稿は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究（C））、（課題番号：19K00535）「近代朝鮮少年運動と韓国児童文学成立期の研究」による研究成果の一部である。

参考文献

＜韓国語文献＞

・『開闢』開闢社（1920年6月～1926年8月、通巻72号）
・『어린이』開闢社（1923年3月～1934年7月、通巻122号）
・李在徹『韓国現代児童文学史』seoul：一志社、1978年
・―――『韓国児童文学作家論』seoul：一志社、1983年
・―――『世界児童文学大事典』啓蒙社、1989年
・―――「児童雑誌『어린이』研究」、『韓国児童文学研究』seoul：啓蒙社、1983年
・이상금『소파 방정환의 생애―사랑의 선물』한림출판사、2005年
・조성운『소년운동을 민족운동으로 승화시킨 방정환』역사공간、2012年
・염희경『소파 방정환과 근대 아동문학』경진、2014年
・민윤식『방정환 평전』스타북스소파、2014年
・大竹聖美「두 사람의 소파 ―巌谷小波와　方定煥―（二人の小波―巌谷小波と方定煥―）」、（韓国）韓国児童文学学会『児童文学評論』第26巻（第1号）、2001年

＜日本語文献＞

・李相琴「方定煥と「オリニ」誌―「オリニ」誌刊行の背景―」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集1995～1996』1997年
・―――「日本と韓国にかける児童文化の橋～韓国オリニ文化をとおして考える～」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集1995～1996』1997年
・李在徹「韓国児童文学の歴史と現状」、児童文学者協会『日本児童文学』1990年6月号
・―――「1920年代の韓半島の児童書――児童雑誌を中心にして」、『子どもの本・1920年代展図録』1991年
・―――「韓日児童文学の比較研究（1）」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集1989～1990』1993年
・李妍炫『方定煥の児童文学における翻訳童話をめぐって―「オリニ」誌と「サランエソンムル（愛の贈り物）」を中心に』大阪大学大学院言語文化研究科修士論文、2004年
・―――「方定煥の翻訳童話研究―『サランエソンムル（사랑의 선물）』を中心に」大阪大学大学院 言語文化研究科博士論文、2008年

・———「巖谷小波の「お伽噺」から方定煥の「近代童話」へ—方定煥の翻訳童話「妖術王アア」の比較考察」、梅花女子大学大学院児童文学会『梅花児童文学』18、2010－2011年
・金志映「方定煥と翻案童話「王子と燕」」、日本比較文学会『比較文学』54、2011年
・金成妍『越境する文学—朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動—』九州大学大学院比較社会文化学府・日本社会文化専攻博士学位請求論文、2008年
・金永順『植民地時代の日韓児童文学交流史研究—朝鮮総督府機関紙「毎日申報」子ども欄を中心に—』梅花女子大学大学院博士学位請求論文、2006年
・大竹聖美『植民地朝鮮と児童文化』社会評論社、2008年
・————「方定煥研究～誕生から10歳まで・幼少期の生家と時代背景：評伝『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』を読む～」、東京純心女子大学『紀要』第18号、2014年
・————「方定煥と天道教——孫秉熙の三女との結婚まで～評伝『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』を読む～」、東京純心女子大学『紀要』第19号、2015年
・————「1919年前後の方定煥——＜小波（ソパ）＞の由来と3・1独立運動」、東京純心大学『紀要』現代文化学部、第20号、2016年
・————「韓国近代児童文学創成期における愛——方定煥の児童文学における愛」、東京純心大学キリスト教文化研究センター『カトリコス』第10号、2017年
・————「新文化運動と方定煥——李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』に見る天道教青年会発足と『開闢』創刊」、東京純心大学『紀要』現代文化学部、第21号、2017年
・————「方定煥の東京留学——李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』を読む」、東京純心大学『紀要』現代文化学部、第22号、2018年
・仲村修『韓国・朝鮮児童文学評論集』明石書店、1997年
・黄善英「交錯する童心——方定煥と同時代日本人文学者における「子ども」——」、東大比較文学会編『比較文学研究』88、2006年
・———『「童心」の思想と詩法——日韓近代の童謡運動』東京大学大学院博士学位請求論文、2007年
・前島志保「児童観史館の中の方定煥」、東京大学比較文学・文化研究会『比較文学・文化論集』1996年

---

[i] パン・ジョンファン（방 전 환）（1899～1931年）ソウル市鍾路区夜珠峴（現、唐珠洞）で米穀商と海産物店を経営した方慶洙の長男として生まれた。朝鮮時代からの旧弊により、児童の人権や児童のための文化というものが成立する以前の近代朝鮮において、現代の児童人権意識や教育、児童文学および文化の源流と見なすことのできる先駆的な朝鮮少年運動（オリニ運動）を先導した。

[ii] 1860年、水雲・崔済愚（1824～1864年）によって創始された東学を起点とする朝鮮固有の民族宗教団体。1894年の東学農民戦争を経て、第3代教組の義菴・孫秉熙（1861～1922年）が1905年に天道教と改称した。天道教と方定煥に関しては、拙稿「方定煥と天道教——孫秉熙の三女との結婚まで～評伝『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』を読む～」（東京純心女子大学『紀要』第19号、2015年3月）がある。

[iii] 方定煥『愛の贈り物（사랑의 성물）』（京城：開闢社、1922年7月7日）に関しては、拙稿「韓国近代児童文学創成期における愛——方定煥の児童文学における愛」（東京純心大学キリスト教文化研究センター紀要『カトリコス』第10号、2017年）がある。

[iv] ユン・チホ（윤치호）（1865～1945年）独立

協会会長、『独立新聞』主筆等、大韓帝国期（1897 ～ 1910年）を中心に活躍した朝鮮近代の知識人

[v] 柳忠熙「近代朝鮮におけるイソップ寓話の翻訳と『ウスンソリ（笑話）』」、朝鮮学会編『朝鮮学報』246号、2018年1月

[vi] 李妊炫「方定煥の兒童文學における翻訳童話をめぐって―『オリニ』誌と『サランエソンムル(愛の贈り物)』を中心に」大阪大学大学院言語文化研究科修士論文、2004年

―――「方定煥の翻訳童話研究―『サランエソンムル(사랑의 선물)』を中心に」大阪大学大学院 言語文化研究科博士論文、2008年

―――「巖谷小波の「お伽噺」から方定煥の「近代童話」へ―方定煥の翻訳童話「妖術王アア」の比較考察」、梅花女子大学大学院児童文学会『梅花児童文学』18、2010－2011年

金志映「方定煥と翻案童話「王子と燕」」、日本比較文学会『比較文学』54、2011年

[vii] いくつかある方定煥の筆名の一つ

[viii] いくつかある方定煥の筆名の一つ

[ix] 1910年の韓国併合によって漢城は京城と改められた。

[x] 1923年1月1日、京城駅に改称

[xi] 1925年竣工

[xii] 大竹聖美「두 사람의 소파 ―巖谷小波와　方定煥― (二人の小波―巖谷小波と方定煥―)」、(韓国) 韓国児童文学学会『児童文学評論』第26巻(第1号) 205－222、2001年

大竹聖美『植民地朝鮮と児童文化』社会評論社、126頁、2008年

この他、李在徹、李相琴、仲村修、金成妍など。

[xiii]「お日さまとお月さま」「フンブとノルブ」「コンチュンイ　パッチュンイ」「ピョルチュブ（鼈主簿）（兎の肝）」等は、表的な朝鮮の昔話

[xiv] 多くの研究者が指摘してきたことであるが、例えば以下の論文でも指摘されている。

・黄善英「交錯する童心――方定煥と同時代日本人文学者における「子ども」――」、東大比較文学会編『比較文学研究』88、2006年

・前島志保「児童観史館の中の方定煥」、東京大学比較文学・文化研究会『比較文学・文化論集』1996年

[xv] 現在手に入りやすい版（1977年、太平出版社版）では、12頁、2行目に同様の記述がある。

[xvi] 1977年、太平出版社版の『童話の研究』では、208頁に「腰折雀」「こぶとり」のことなどの記述がある。

[xvii] 穏やかな波、さざ波のこと。同じ意味の筆名にあたる「小波（ソパ）」は漢字語で表記したさざ波で、「잔물（チャンムル）」は、純粋朝鮮語（ハングル）で表したさざ波である。方定煥の筆名を「小波」一つだけを見て、すぐに巖谷小波と関連付けるのは表層的すぎるかもしれない。方定煥の信仰や思想などの内面を考えると、独立運動の一端を担っていた人物が短絡的に日本人の名前を模倣するとは考えにくく、むしろ、さざ波を意味する純粋朝鮮語の「잔물（チャンムル）」からは、天道教の教えを社会にさざ波のように伝えたい、穏やかな変革のウェーブを起こしたいという意味が想起される。